

宗は頓莫賀達干を冊して武義成功可汗と爲したりと見ゆれば、兩書の記載も、亦此の可汗の死を大曆十四年とせるものに外ならず。^{〔九三〕}

此の可汗の時代に至りては、回鶻の唐に對する勢力は著しく發展して常に横暴を極め、其の在世中唐を侵し、若しくは侵さんとせしこと少くとも四回に及び、即ち第一回には寶應元年（七六二年）四月肅宗死して代宗繼ぎ、其の秋劉清潭を遣して好を修め、且つ史朝義を討伐する爲に援を乞はしめしに、之に先立ち可汗は八月既に史朝義の誘に應じ、唐を侵さんとして自ら軍を率ゐて南下せり、而して途上に於て唐使と會せしも其の請を容れず、進みて太原に入りしが、唐が其の可敦の父僕固懷恩を遣して説かしむるに及び、初めて意を翻して唐を援け、史朝義を討つに至れり、第二回は永泰元年（七六五年）僕固懷恩反するや、回鶻は吐蕃と共に軍を出して懷恩を助け、唐を侵したりしが、懷恩死するに及びて吐蕃と争ひ、涇陽に至りて郭子儀に降り、轉じて唐軍と共に、吐蕃の討伐に従へり、第三回は大曆十三年太原地方に寇し唐軍を破りたりしが、張光晟の之を討つに及びて初めて退けり、第四回は前に見たるが如く大曆十四年代宗死し德宗立つや、可汗は之に乗じて、親から國を擧げ師を悉して南下せんとし、之が爲に宰相莫賀達干と争ひ、遂に宰相の爲に殺されて止めり。^{〔九三〕}而して此等數次の侵掠を除きては、表面上唐と親善の關係に在りしが如しと雖、然も此の間は凶暴貧婪の行爲を擅にしたるものにして、唐を援けて内亂の戡定に従事したることも、固とより援助を名として侵掠の實を遂げたるに過ぎず、只だ唐の國勢甚しく衰退し、回鶻の横暴を如何ともする能はず、一に其の爲すが儘に委するの外無き情態なりしを以て、兩者の間に戰の生ぜざりに止れり、偶々唐が之を抑へ、其の要求を退けんとするに當りては、則ち直に入寇の事實を生じたるものなれば、要する